

全国に広まる 「木育」の取組

木材や木製品との触れ合いを通じて木材への親しみや木の文化への理解を深め、木材の良さや利用の意義を学んでもらう「木育」の取組は、概念の発祥から約20年の時を経て、全国で様々な取組が行われています。本特集では、木育に取り組まれている方の声をお届けします。



ウッドデザイン賞 2024 農林水産大臣賞受賞 浦河フレンド森のようちえん

10月は「木材利用促進月間」です。林野庁では、暮らしの中に木材製品を取り入れることで、日本の森林を育てていく「木づかい運動」を展開し、森林資源の循環利用につながる木材利用の意義を発信しています。



一般社団法人 南三陸YES工房
代表理事 大森 丈広

一般社団法人ウッドデザイン協会主催 「WOOD DESIGN EXPERIENCE@仙台」

2025年5月23日（金）から24日（土）にかけて、宮城県仙台市AER仙台アトリウムにて「WOOD DESIGN EXPERIENCE@仙台」が開催されました。イベントでは、二酸化炭素を吸収する機能や土砂災害を防ぐ機能など森林の持つ多面的機能についての説明とともに、スギやヒノキの花粉発生源対策として、花粉の少ない木に植え替える取組が紹介されました。



① どのような活動を主に行っている会社ですか

イベント2日目には、一般社団法人南三陸YES工房による南三陸町のスギを利用したペンスタンドづくりが開催され、親子連れを含む100名近い方の参加がありました。

今回は、その南三陸YES工房さんに、木育の活動を通してどのような点を重要視されているかお話を伺いました。

山の環境問題への意識を高め、持続可能な社会の実現を目指すためには、プレイヤーだけではなく、一般の方々の理解と協力の輪が広がっていく必要があることを、お客様との交流を通じて感じたことが「木育」を始めたきっかけでした。説教くさいお話などではなく、木に触れながら楽しく学べる体験を通じて「自分事化」、「共感」出来る環境、マインドを作っていくことが、時間がかかっても山の課題解決に繋がるとても大事なことだと思い、現在は参加したひとが楽しく学べる「木育」を目指しています。南三陸町内外での木育ワークショップの相談の機会が増える中で、南三陸杉のPRだけでなくYES工房の取り組みを紹介する機会もいただいております。

③ 「木育」の活動を通してどのようなことを伝えたいですか

「南三陸YES工房」は2011年に発生した東日本大震災後、地域住民の「雇用」と「交流」の場づくりを目指し立ち上がったモノづくり工房です。山と海に囲まれた自然豊かな町、宮城県南三陸町にあるかつての校舎をリノベーションした建物の中で、地域資源である「南三陸杉」を活用したノルティグッズ、記念品の製作のほか、モノ



いのか？一般の方にはとても分かりづらいものだと思います。国土の3分の2が森林の日本では、実は都会も地方も関係なく「森林」が暮らしを密接に支えているという「木」を通じて、木という地域資源の利活用を目指しています。

暮らししが豊かになったり、安全安心で住みやすい環境の醸成に繋がっていく可能性があるという事を「木育」を通じて、より多くの方々に伝えていきたいと考えています。「木」を活用したモノづくりを行っているYES工房として林業家と一般の方々をつなぐ橋渡しをしていきたいです。

また、10月24日(金)～25日(土)には、福岡にて「WOOD DESIGN EXPERIENCE@福岡」が開催されます。ぜひご来場ください。

一般社団法人南三陸YES工房
<https://yes-factory.jp/>





木育プログラムの実施

楽天グループ 株式会社/株式会社 東京チェンソーズ/一般社団法人more trees/特定非営利活動法人 放課後NPOアフタースクール

一般社団法人more trees 事務局長 水谷 伸吉



2024年度、楽天グループ株式会社主催の都内小学校のアフタースクール事業の中で、小学生を対象とした木育プログラムが実施されました。木製スプーンを作るプログラムでは、材料になっている木の産地や種類などを学びながら、木製品の良さを子供たちに体感してもらいました。今回は、プログラムを実施された一般社団法人more treesにお話を伺いました。

一般社団法人more treesは、音楽家・坂本龍一氏が創立し、建築家・隈研吾氏が代表を務める森林保全団体です。都市と森をつなぐを理念に掲げ、国内外での植林・育林活動を通じて、生物多様性に配慮した持続可能な森づくりを推進しています。さらに、国産材を活用したプロダクト開発やワークショップ、イベントなどを通じて、都市生活者に森の恵みや木の魅力を伝えています。木育活動にも力を入れており、子どもだけでなく大人に対しても、木と触れ合いながら森や環境への理解を深める機会を提供しています。

②「木育」の取り組みを始めようとしたきっかけは何ですか

木材はこれまで、住居や家具、食器など、日々の暮らしの中で欠かせない存在でしたが、近年では金属やプラスチックなど素材に置き換わり、木に触れる機会が減っています。建築分野での木材利用も重要なですが、一般消費者がもっと身近に木のぬくもりを感じられる場も必要だと考えました。さらに、都市部の学校や企業、商業施設から木育への関心が高まり、ニーズが寄せられるようになったことも後押しとなり、more treesでは木育を通じて、木とふれあう体験を広げ、森や環境への理解を育む取組を始めることになりました。

①どのような活動を主に行っている会社ですか



木育を通して伝えたいのは、木のぬくもりや香りといった五感で感じる魅力だけではなく、木が育った産地とのつながりの大切さです。消費者は食品の産地には関心がある一方で、木材の産地や樹種は意識されにくく、提供側も十分に伝えきれていないのが現状です。また、森林や林業、そして地域の魅力と課題や、持続可能な木材を選ぶことの意義についても、消費者に伝えたいと考えています。木を使うことで森を守り地域とつながるんだ、という意識を育むことで、都市と森の距離を縮めたいと考えていますし、実際に参加者にこうした意識が芽生えている実感を持っています。



木育プログラムの内容については、こちらのURLをご確認ください。

楽天グループ株式会社ウェブサイト

https://event.rakuten.co.jp/area/japan/woodchange/event/event_3/



木育・森育楽会in小田原

NPO法人 木育・木づかいネット

NPO法人木育・木づかいネット

埼玉大学教授/NPO法人木育・木づかいネット

理事長 浅田 茂裕



第1回(2016年・新木場)以降、全国各地で開催されるたびに、参加する人たちの輪が少しずつ広がっています。石川や函館、群馬など地方開催を重ねる中で、地元の林業関係者や行政、保育・教育現場との新たな連携が生まれると同時に、それぞれの地域が抱える課題も見えてきました。地域のキーパーソン同士のつながりも増え、開催地において木育・森育の組織化も見られるようになりました。第10回(2024年)では、開催地小田原市が実施する「ま

② 第1回から第10回までの木育の変化

私は「木育・森育楽会」を始めたのを見、経験を共有し、学びあつ場をつくりたないと考えたからです。木や森と人との関係

を再考し、地域それぞれの木育はもちろん、森林、林業、木材利用に関わる課題について参加者同士で議論を深める場を目指しています。10年前の東京開催を皮切りに、途中オンライン開催などもありましたが、九州、大阪、石川、函館、群馬など全国を巡りながらプレイヤーの輪を広げてきました。「楽会」という言葉には、参加者同士が気軽に話し合い、木に親しむことを通じて、人と人、地域と森がゆるやかにつながり、未来を創造する場にしたいという願いが込められています。

2024年10月19日(土)から20日(日)にかけて、第10回目となる「木育・森育楽会in小田原」が神奈川県小田原市にて開催されました。ワークショップやトークセッション形式でのイベントを通して、木育のあり方や、木育を通してどのような社会にしていきたいかについて議論が深められました。今回は、主催者であるNPO法人木育・木づかいネットを通して感じた木育のあり方についてお話を伺いました。

私たちが「木育・森育楽会」を始めたのは、全国各地で活動するプレイヤーと知見、経験を共有し、学びあつ場をつくりたないと考えたからです。木や森と人との関係

① 木育・森育楽会を始めたきっかけと「楽会」の名の由来



木育が次の段階に進むためには、学校教育との接続、指導者養成などの課題解決が必要です。また森林環境譲与税等の活用や木育に関心を持つ企業等とのマッチング、継続的な学びの機会の創出など、継続・発展を支える仕組み作りも必要と考えています。これまで、地域の林業や文化とリンクしながら、木工、玩具、森林体験など様々な木育が提案、実践されてきました。今後さらに求められるのは、生活者と木と森との新たな、そして継続的な関係性構築です。鍵となるのは「経験の改善」であり、呼びかけ、説得ではなく、驚きや感動を与える新たな実践の開発が必要でしょう。多くの課題がありますが、木育の仲間とともに、「楽しみながら」解決できればと考えています。

③ 今後の木育活動の展望

木育が次に進むためには、学校教育との接続、指導者養成などの課題解決が必要です。また森林環境譲与税等の活用や木育に関心を持つ企業等とのマッチング、継続的な学びの機会の創出など、継続・発展を支える仕組み作りも必要と考えています。これまで、地域の林業や文化とリンクしながら、木工、玩具、森林体験など様々な木育が提案、実践されてきました。今後さらに求められるのは、生活者と木と森との新たな、そして継続的な関係性構築です。鍵となるのは「経験の改善」であり、呼びかけ、説得ではなく、驚きや感動を与える新たな実践の開発が必要でしょう。多くの課題がありますが、木育の仲間とともに、「楽しみながら」解決できればと考えています。

大阪・関西万博レポート Wood Change 2025



木製カバンを手に取って
木の質感を感じる来場者▶



林野庁では、2025年9月23日～29日、大阪・関西万博において日本の木材利用を発信する期間展示を行いました。来場者は13,000名を超えて、多くの方に「ウッド・チェンジ」に触れていたところができました。



以下ウェブサイトに今回の展示内容等掲載しております。ぜひご覧ください。

(林野庁特設ウェブサイト) <https://rinya-expo2025.maff.go.jp/>

登壇者等の概要は
こちら



展示初日の23日には、同会場内ステージにて「木づかいシンポジウム2025 in万博」を開催しました。小坂林野庁長官による挨拶の後、3名の方にご講演いただきました。初めて、株式会社竹中工務店 花井厚周氏より「木造・木質建築の最新動向 高層木造建築の紹介」について、次に、株式会社セブン・イレブン・ジャパン 伊東誠氏より「木材の活用と環境対応の取り組み」について、最後に、株式会社木質素研究所 山田竜彦氏より「木材成分から作る高性能プラスチック日本発の新素材「改質リグニン」の可能性」についてご講演いただき、木造建築や木材の技術開発の最新事例を交えた木材利用の可能性について紹介いただきました。会場に加え、オンラインでも多数の参加を頂きました。当日のダイジェスト動画は、林野庁ウッド・チェンジウェブサイトに後日掲載します。

◆木づかいシンポジウム2025 in万博



登壇者らの椅子にも木づかい
2024年ウッドデザイン賞受賞作品「"SU"tools」



シンポジウム登壇者と記念撮影をする小坂林野庁長官(中央)

～ウッド・チェンジロゴマークについて～



ウッド・チェンジロゴマークは、「ウッド・チェンジ」の趣旨に賛同し、木材利用の取組を積極的に推進していることのPRにご使用いただけます。

企業、団体、地方公共団体の方に広くロゴマークをご使用いただくことで、ウッド・チェンジの輪が大きくなり、「木づかい運動」を盛り上げ、木材利用の需要拡大につながります。多くの方の使用登録をお待ちしています。

詳しくは、以下URLをご確認ください。

<https://www.rinya.maff.go.jp/j/riyou/kidukai/wood-change-logo.html>

